資料

挑発場面における児童の社会的認知と 応答的行動との関連についての研究

濱 口 佳 和*

A RESEARCH ON RELATIONSHIPS BETWEEN CHILDREN'S SOCIAL COGNITION AND THEIR REACTIVE BEHAVIORS IN PROVOCATIVE SITUATIONS

Yoshikazu HAMAGUCHI

The purpose of this study was to investigate the relationships between social cognition and reactive behaviors of victims in a situation where children were provoked by peers. Subjects were 293 elementary school children in the 4th, 5th, and 6th grades (149 boys and 144 girls). While presenting one hypothetical provocative situation, 15 social cognitive variables including 3 domains of social information processing (interpretation of provocative situations, goal-setting, utility judgement of reactive behaviors) and 4 reactive behaviors (assertive, aggressive, say nothing, crying) were assessed by means of self-report questionnaires. As a result of multiple regression analysis, it was found that these social cognitive variables were moderately correlated with all reactive behaviors. Especially, assertive goal-setting, friendly goal-setting, and utility judgement of assertive behaviors were revealed to be important predictors of reactive behaviors. By additional analysis, hostile attributional bias which belonged to the domain of interpretation of provocative situations, was revealed to be a predictor of both assertive and friendly goal-settings.

Key words : provocative situations, social information processing, social behaviors, questionnaires, elementary school children.

問 題

「仲間による挑発(provocation)場面」とは、仲間によって何らかの被害がもたらされる場面である。この場面では、適応的な児童と仲間から拒否されている児童とで、加害者に対する応答的行動に大きな差があり、社会的スキル訓練などの教育的介入で取り上げる必要性が特に高い場面であることが指摘されている (Dodge, McClasky, & Feldman, 1985)。

被害者となった児童によって遂行される応答的行動としては、身体的・言語的攻撃行動、仲間はずれ、大

人や教師などの権威者に対するアピールといった直接的、間接的な報復的攻撃行動、加害者に対する説明の要求などの報復を抑制した正当な主張的行動、何もしない、泣くといった行動があげられている (Cairns, Cairns, Neckerman, Ferguson, & Gariépy, 1989; Dodge, 1986; Dodge, Pettit, McClasky & Brown, 1986)。既に、仲間関係における児童の地位の高さと身体的・言語的な報復的攻撃行動との間に負の関連性があること、仲間関係における高地位者は正当な主張的行動をとることが多いことが知られている (Dodge, Murphey, & Buchsbaum, 1984; Price & Dodge, 1989)。自己報告形式の質問紙と仲間指名法を用いて小学校高学年の児童を対象とした濱口 (1989) の調査でも、仲間関係における地位の低い児

* 筑波大学心理学研究科 (Doctoral Program in Psychology, University of Tsukuba)

童は、泣く、乱暴・悪口といった行動をとることが多く、地位の高い児童は報復抑制＋理由、許容といった行動を遂行することが多いということが明らかにされている。

近年、攻撃行動や向社会的行動の規定因として、さまざまな社会認知的変数が検討されている。これまでに、原因帰属 (Grusec & Redler, 1980; 大淵, 1982)、他者の意図の判断能力 (Dodge et al., 1984)、対人的目標設定 (Renshaw & Asher, 1983)、結果価値 (Boldizar, Perry & Perry, 1989)、結果予期 (Perry, Perry, & Rasmussen, 1986) などの変数が検討されてきた。これらの研究をふまえると、仲間による挑発に対する応答的行動は、大きく分けて次の3つの領域における社会的認知によって規定されるものと思われる。①挑発状況をどのように解釈するか (挑発状況の解釈)、②その場面においてどのような結果を獲得しようとし、また、回避しようとするか (対人的目標設定)、③目標を実現する上で、可能な応答的行動がどの程度有効であると判断するか (応答的行動の有効性判断)。そして、挑発場面における応答的行動の多様性は、これらの各領域における社会的認知の個人差によってもたらされるものと思われる。

挑発状況の解釈とは、仲間による加害行為がどのようないきさつで行われたかを解釈する部分である。成人の場合でも児童の場合でも、被害者の報復的攻撃行動は、加害者の意図 (故意、過失、不可抗力) によって大きく左右されることは既によく知られており (Dodge, 1980; 大淵, 1982; 大淵, 1986)、従って、加害者の意図についての判断はとりわけ重要な認知的変数と言えよう。加害者の意図の判断に関する認知的変数としては、まず第1に、加害者の意図や加害行為が行われた際の文脈的情報が与えられた場合に、それを正しく解読できる能力 (意図-手がかりを発見技能: intention-cue detection skills; Dodge et al., 1984) があげらよう。加害者の意図を示す社会的手がかりに適切に着目し、そこから加害者の意図や加害行為の原因を正しく推論できる能力は、被害者の応答的行動と関連があると思われる。即ち、加害者の非敵対的意図 (援助、過失、不可抗力) を正確に判断できることは、報復を抑制した正当な主張行動 (以下「主張的行動」と略す) の正の予測子となり、報復的攻撃行動の負の予測子となることが予想される。また、加害者の敵対的意図を正確に判断できることは、報復的攻撃行動の正の予測子となることが予想される。

挑発状況の解釈の第2の変数としては、加害者の意図や加害行為が行われた際の文脈的情報が与えられない、いわば「曖昧な」挑発事態で、加害者に敵意を帰

属する傾向 (敵対的意図帰属バイアス; hostile attributional bias; Dodge & Somberg, 1987) が考えられる。日常における挑発事態では、挑発のなされた十分な文脈的情報が与えられない場合が多い。そこで、このような事態で応答的行動を規定するのは、自分に被害がもたらされたということだけで、加害者に敵意を帰属させてしまう傾向であると思われる。従って、敵対的意図帰属バイアスは、報復的攻撃行動の正の予測子となり、主張的行動の負の予測子となることが予想される。

対人的目標設定とは、所与の対人的相互作用において、行為者がどのような結果の獲得と回避を目標とするかに関わる変数である。日常の対人的相互作用場面は、あまり構造化されておらず、それ故、同じ社会的状況におかれた場合でも、そこでどのような結果を目指すかについては大きな個人差が存在し、この個人差がその場面における社会的行動の差異に結びつくものと考えられる。小学校高学年と中学年の人気のある児童と不人気な児童を対象とした、Renshaw & Asher (1983) の研究では、人気のある児童は不人気な児童よりも、友好的で主張的な目標を設定することが見出されている。仲間による挑発場面においては、相手との友好的な関係を維持しつつ (友好的目標)、もたらされた被害に対して、謝罪、弁償など正当な償いを要求する (主張的目標) といった目標が特に重要となると考えられる。友好的目標設定は、報復的攻撃行動の負の予測子となり、主張的行動の正の予測子となることが予想される。また、主張的目標設定は主張的行動の正の予測子となり、「無言」の負の予測子となることが予想される。

応答的行動の有効性判断とは、挑発場面におけるある特定の応答的行動が、所与の目標を実現する上でどの程度有効であるかについての主観的な期待である。これには、友好的目標にとっての有効性の判断と、主張的目標にとっての有効性の判断の2通りが考えられる。ある行動Aが、有効であると判断される程、また、A以外の行動は有効でないと判断される程、行動Aがいくつかの行動の選択肢の中から選択されやすくなるものと考えられる。すなわち、ある行動Aの友好的目標にとっての有効性の判断と、主張的目標にとっての有効性の判断は、ともにその行動の正の予測子となり、その他の行動の友好的ならびに主張的目標は、行動Aの負の予測子となることが予想される。

本研究では、挑発状況の解釈、対人的目標設定、応答的行動の有効性判断の3つの領域に属する社会認知的変数が、挑発場面における各々の応答的行動とどのような関連を持つのかを明らかにすることを目的とする。

方 法

(1)質問紙

本研究においては測定具として、社会的認知質問紙と社会的行動質問紙の2つが用いられた。

A. 社会的認知質問紙

社会的認知質問紙では、主人公が、描いている絵を同性の仲間びしょ濡れにされてしまうという仮想挑発エピソードが、3コマ漫画によって提示された。そして、被験者自身が主人公であるという想定の下で、そのような事態での社会的認知が、挑発状況の解釈、対人的目標設定、応答的行動の有効性判断の3つの領域にわたって尋ねられた。

①挑発状況の解釈

挑発状況の解釈の領域には、意図一手がかり発見技能4問、敵対的意図帰属バイアス3項目が含まれた。

意図一手がかり発見技能の問題では、加害者の意図が異なる4種類の仮想挑発エピソード（敵対的、援助的、過失、不可抗力）が3コマ漫画によって提示された。加害者の4種類の意図は、加害者の顔面表情、台詞、加害行為がなされた物理的条件を変えることによって表現された。4つのエピソードごとに、加害者の(1)敵対的意図の有無、(2)援助的意図の有無、(3)過失の有無について、true-false 形成の質問がなされた*。(1)～(3)の項目に対する正答数の合計値が、各エピソードにおける意図一手がかり発見技能の得点とされた。したがって、意図一手がかり発見技能は全部で4問(エピソード)、1問あたりの得点は最低0点、最高3点とされた。4種類の仮想挑発エピソードでは、それぞれ男子用と女子用が用いられたが、3コマ漫画の登場人物の性別は被験者の性別と一致させた。登場人物の性別を除けば、各エピソードの3コマ漫画の内容は男子用と女子用で同一であった。意図一手がかり発見技能の問題は、1エピソードごとにB5版の紙に印刷され、ひとつの冊子(冊子A)にまとめられた。なお、本研究で採用された4つの仮想挑発エピソードは、男女各10名の大学生を対象とした予備調査の結果(濱口, 1989)、合計12のエピソードの中から、正答率80%を越えたものであった。

敵対的意図帰属バイアスに関しては、被害者の背後

.. 敵対的エピソードの正答は、敵対的意図一あり、援助的意図一なし、過失性一なし；援助エピソードの正答は、敵対的意図一なし、援助的意図一あり、過失性一なし；不可抗力エピソードの正答は、敵対的意図一なし、援助的意図一なし、過失性一なし；過失エピソードの正答は、敵対的意図一なし、援助的意図一なし、過失性あり。

の視点から描かれた3コマ漫画と、補足説明用のト書きをつけて、社会的情報の不足した同性の仲間による「曖昧な」挑発エピソードが提示された。被害者としては被験者自身を想定させた上で、絵の中の「おともだち」がこの加害行為を意図的にやったと思う程度について、TABLE 1 に示す3つの項目について「ぜったいそうではないと思う(1点)」から「ぜったいそうだと思う(4点)」までの4段階評定が求められた。ここで用

TABLE 1 社会的認知質問紙の各項目の平均と標準偏差

項 目	M	SD
(意図一手がかり発見技能：Range=0-3)		
不可抗力エピソード	2.50	0.61
敵対的エピソード	2.70	0.59
援助的エピソード	2.63	0.58
過失エピソード	2.69	0.56
(敵対的意図帰属バイアス：Range=1-4)		
そのお友達*はいじわるしようとして、わざと机にぶつかった	1.82	0.69
そのお友達は水入れを倒そうとして、わざと机にぶつかった	1.74	0.69
そのお友達は絵をびしょ濡れにしようとして、わざと机にぶつかった	1.68	0.69
(友好的目標設定：Range=1-4)		
そのお友達と今までどおり仲良しでいたい	3.61	0.68
そのお友達と絶交したくない	3.43	0.90
○しかえしに、そのお友達を困らせてやりたい	3.26	0.84
○しかえしに、そのお友達を嫌な気持ちにさせてやりたい	3.41	0.75
(主張的目標設定：Range=1-4)		
ぬれてしまった机や床を、そのお友達にきれいにふいて欲しい	2.89	0.82
どうして机にぶつかったのか、そのお友達に説明してほしい	2.83	0.98
自分が嫌な気持ちになっていることを、そのお友達にわかって欲しい	3.04	0.87
そのお友達に謝ってほしい	3.06	0.87
(応答的行動の有効性判断；友好的目標：Range=1-4)		
怒らずに、ぶつかった理由をきく	2.78	0.70
怒らずに、「もう少し気をつけてよ」と注意を促す	2.84	0.75
何も言わない	2.91	0.81
泣く	2.62	0.82
仲間はづれにする	1.48	0.80
先生に言いつける	2.08	0.75
そのお友達を叩いたり蹴ったりする	1.43	0.77
(応答的行動の有効性判断；主張的目標：Range=1-4)		
怒らずに、ぶつかった理由をきく	3.04	0.63
怒らずに、「もう少し気をつけてよ」と注意を促す	2.89	0.73
何も言わない	2.84	0.75
泣く	3.00	0.82
仲間はづれにする	2.03	1.03
先生に言いつける	2.82	0.79
そのお友達を叩いたり蹴ったりする	1.86	1.03

○は逆転項目

*項目中の「そのお友達」とは、加害者を意味する

いられた「曖昧な」挑発エピソードも、男子用と女子用が用いられたが、登場人物の性別以外は、3コマ漫画の内容も補足説明用のト書きもともに同一のものとされた。

②対人的目標設定

同性の仲間による「曖昧な」挑発エピソードと敵対的意図帰属バイアスの質問項目が印刷された次のページの冒頭に、「こんなとき、あなたは、どんなことをかかんがえますか。」という質問文が示され、TABLE 1 にあげた、友好的目標設定、主張的目標設定各4項目、合計8項目について、「ぜんぜんそう思わない」(1点)～「ほんとうに、そう思う」(4点)の4段階評定が求められた。質問項目は一定の無作為な順序で提示された。なお、本研究で採用された8項目は、2名の心理学専攻の大学院生に、無作為な順序で提示し、「友好的」、「主張的」の2つのカテゴリーへの強制分類を求めたところ、100%の一致率ですべての項目が正しく分類されたものであった。

③応答的行動の有効性判断

対人的目標設定の質問項目に続いて、応答的行動の有効性判断が測定された。ここでは、3つの報復的攻撃行動(身体的攻撃行動、先生に言いつける、仲間はずれ)、2つの主張的行動(怒らずに理由を聞く、怒らずに注意を促す)、「何も言わない(以下「無言」と略す)」、「泣く」といった7つの行動の各々について、「もしこんなとき、あなたが……したらどうなるでしょうか」という質問を与え、友好的目標(関係維持)の実現に対する有効性(ぜったいにきらわれる-1点～ぜったいにきらわれない-4点)ならびに、主張的目標(後始末)の実現に対する有効性(濡れた机や床をぜったいに、ふいてくれない-1点～ぜったいにふいてくれる-4点)について4段階評定が求められた。7つの行動は一定の無作為な順序で提示された。

同性の仲間による「曖昧な」挑発エピソードと、敵対的意図帰属バイアス、対人的目標設定、応答的行動の有効性判断の各領域の質問項目は、意図一手がかり発見技能の問題の冊子とは別の冊子(冊子B)にまとめられた。冊子Bの冒頭には「曖昧な」挑発エピソードが印刷され、それにつづいて、各領域の質問項目が、敵対的意図帰属バイアス、対人的目標設定、応答的行動の有効性判断の順に並べられた。したがって、被験者に「曖昧な」挑発エピソードが提示されるのは、原則としては冊子Bの冒頭の1回のみであった。

B. 社会的行動質問紙

敵対的意図帰属バイアスの測定で用いたのと同じ、同性の仲間による「曖昧な」挑発エピソードと補足説

明用のト書きが質問紙の冒頭で提示された。そして、被験者自身が被害者であるという想定の下で、先に触れた7種類の応答的行動の各々について、自分だったらそのような行動をとると思う程度について、「ぜったいに、しない」(1点)～「ぜったいに、する」(4点)の4段階で評定が求められた。7種類の応答的行動は、一定の無作為な順序で提示された。

(2)実施手続

作成された質問紙は、各学級担任の教師がすべての教示と説明文を読み上げる形式で、一斉集団方式で実施された。測定は5日以内に2回行われ、第1回の測定においては社会的認知質問紙が冊子A、冊子Bの順序で実施された。第2回の測定では、社会的行動質問紙が実施された。データの収集は1989年11月下旬～12月初旬に行われた。

(3)被験者

東京都下K市の公立小学校1校、合計293名。4年生3学級89名(男子44名、女子45名)、5年生3学級102名(男子52名、女子50名)、6年生3学級102名(男子53名、女子49名)であった。

結果と考察

(1)社会的認知測度の分析***

全サンプル($n=293$)を対象として算出した社会的認知質問紙の各項目の平均値と標準偏差をTABLE 1に示す。社会的認知の項目相互間の相関を算出したところ、敵対的意図帰属バイアス(.68～.77)****、友好的目標設定(.28～.56)、主張的目標設定(.42～.54)、主張的行動の有効性判断(友好的目標,.37)、同(主張的目標,.36)、攻撃的行動の有効性判断(友好的目標,.14～.46)、同(主張的目標,.29～.54)の各領域内で項目間相関が高かったので、後の分析の繁雑さを軽減するために、これらの変数ごとに尺度化を試みた。各尺度の平均値、標準偏差、 α 係数をTABLE 2に示す。 α 係数の値は.52から.88の範囲に分布した。尺度を構成する項目が2～3個のものについては、.50台とやや低いが、全体としてはほぼ満足な結果が得られた。最終的に分析の対象となった社会認知の変数は、不可抗力判断、敵意判断、援助意図判断、過失判断、敵対的意図帰属バイアス、友好的目標設定、主張的目標設定、主張的行動の有効性判断

*** 本研究におけるデータ解析は、すべて筑波大学学術情報処理センターの統計パッケージSPSS-Xによった。

**** カッコ内の数値は、項目間相関係数の最小値と最大値である。なお、尺度を構成する項目が2つしかない場合には、2項目間の相関係数を示した。

(友好的目標), 同(主張的目標), 攻撃的行動の有効性判断(友好的目標), 同(主張的目標), 「無言」の有効性判断(友好的目標), 同(主張的目標), 「泣く」の有効性判断(友好的目標), 同(主張的目標), 以上の15の変数であった。

TABLE 2 社会的認知各尺度の平均, SD, α 係数

下 位 尺 度		M	SD	α
敵対的意図帰属バイアス	(3)	5.24	1.87	.88
友好的目標設定	(4)	13.72	2.41	.74
主張的目標設定	(4)	11.85	2.76	.79
主張的行動の有効性 (F目標)	(2)	5.63	1.20	.54
攻撃的行動の有効性 (F目標)	(3)	4.99	1.66	.53
主張的行動の有効性 (A目標)	(2)	5.92	1.12	.52
攻撃的行動の有効性 (A目標)	(3)	6.72	2.24	.67

() 内の数字は項目数を表わす。F目標＝友好的目標, A目標＝主張的目標

それぞれの社会認知的変数に対して, 性と学年を被験者間要因とする分散分析を行った。「泣く」の有効性判断(友好的目標)で学年の主効果が有意となったが($F(2,284)=4.39, p<.05$; 4年, 2.82; 5年, 2.48; 6年, 2.58), それ以外は有意な学年差は見られなかった。援助意図判断($F(1,282)=4.49, p<.05$), 友好的目標設定($F(1,283)=19.02, p<.001$), 主張的行動の有効性判断(主張的目標; $F(1,283)=5.27, p<.05$), 攻撃的行動の有効性判断(主張的目標; $F(1,283)=8.91, p<.01$), 「無言」の有効性判断(主張的目標; $F(1,283)=6.01, p<.05$)で, 性の主効果が有意となり, 男子より女子のほうが高いことが明らかになった。また, 主張的目標($F(1,283)=16.12, p<.001$)と主張的行動の有効

性判断(友好的目標; $F(1,283)=7.90, p<.01$)でも性の主効果が有意となり, 女子より男子のほうが高いことが明らかになった。

(2)行動測度の分析

TABLE 3 に全サンプル($n=293$)を対象として算出した行動測度の各項目の平均値と標準偏差をあげる。行動測度7項目相互の相関係数を算出したところ, 主張的行動(報復抑制+理由と報復抑制+注意の2項目: $r=.34$), 報復的攻撃行動(言いつけ, 仲間はずれ, 乱暴・悪口)の3項目: 内部相関の最小値は.30, 最大値は.44)においてそれぞれ比較的高い内部相関が得られたので, それぞれ尺度化が試みられた。主張的行動と報復的攻撃行動の α 係数は, それぞれ, .51と.63であった。

TABLE 3 行動測度の平均とSD

行動測度	M	SD
報復抑制+理由	3.05	0.80
報復抑制+注意	2.90	0.85
無 言	1.86	0.71
泣 く	1.60	0.70
言いつけ	2.02	0.88
仲間はずれ	1.72	0.80
乱暴・悪口	1.72	0.80

(各項目の得点の範囲は 1点～4点)

性×学年の分散分析の結果, 1点～4点)報復的攻撃行動($F(1,281)=31.05, p<.001$), 無言($F(1,283)=27.89, p<.001$), 泣く($F(1,276)=7.05, p<.01$)で有意な性差が見られた。報復的行動は男子のほうが高く, 無言と泣くは女子のほうが高いことが明らかにされた。いずれの測度においても, 有意な学年差は見られなかった。

(3)社会認知的変数と応答的行動との関連性の検討

TABLE 4 に15の社会認知的変数から各行動測度へ

TABLE 4 4つの行動測度についての相関係数と標準偏回帰係数

説明変数\基準変数	主張的行動		報復的攻撃行動		無 言		泣 く	
	β	r	β	r	β	r	β	r
不可抗力判断	-.10	-.06	.11*	.00	.08	.01	-.17*	-.10*
敵意判断	-.12	-.07	.01	-.03	.05	-.03	.01	-.03
援助意図判断	-.00	.02	-.13*	-.13*	-.02	-.01	.08	.05
過失判断	-.04	-.06	-.10*	-.11*	-.02	-.02	.11	-.00
敵対的意図帰属バイアス	-.11*	-.09*	-.02	.21***	-.02	-.14*	.19**	.20***
友好的目標設定	.22***	.16**	-.36***	-.47***	.03	.09*	.07	-.04
主張的目標設定	.36***	.24***	.24***	.35***	-.22**	-.31***	.08	.10*
[応答的行動の有効性判断 (友好的目標)]								
主張的行動	.11*	.21***	-.20***	-.15**	-.22**	-.22***	-.18*	-.14**
攻撃的行動	.05	.01	.06	.11*	.15*	.07	.06	.01
無言	.00	.00	.02	.07	-.01	-.05	-.08	-.07
泣く	-.07	.10*	.13*	.02	-.16*	-.11*	.01	-.01
[応答的行動の有効性判断 (主張的目標)]								
主張的行動	.10	.23***	-.02	-.18**	.08	.03	.13	-.05
攻撃的行動	-.04	-.00	-.07	-.10*	.01	.10*	-.03	-.06
無言	.15*	.14**	-.03	-.13*	.04	.12*	-.18**	-.16**
泣く	.02	.14**	-.01	-.03	.11	.03	.03	-.02
R		.47***		.58***		.42***		.35**

(* $p<.10$; ** $p<.05$; *** $p<.01$; **** $p<.001$, なお, β は標準偏回帰係数, r は相関係数)

の重回帰分析の結果を示す。いずれの行動尺度においても、重相関係数の値は有意となり、本研究で取り上げられた社会認知の変数が応答的行動と関連があることが明らかにされた。重相関係数は全て有意で、主張的行動.47 ($F=5.01$, $df=15/259$, $p<.001$), 報復的攻撃行動.58 ($F=8.87$, $df=15/258$, $p<.001$), 無言.42 ($F=3.69$, $df=15/260$, $p<.001$), 泣く.35 ($F=2.42$, $df=15/253$) であった。

社会認知の変数と応答的行動の関連を行動ごとに見ると、主張的行動については、主張的目標設定(.36)と友好的目標設定(.22)の標準偏回帰係数が有意となり、これらが主張的行動の正の予測子となることが明らかにされた。これは、仲間による挑発場面では、主張的な目標を設定する傾向が強いほど、また、友好的な目標を設定する傾向が強いほど、報復的な行動を抑制しつつ、主張的行動をとることを意味しており、予想された結果であると言えよう。なお、「無言」の有効性判断(主張的目標)も主張的行動に対して、低いながらも正の有意な標準偏回帰係数(.15)を示したが、これは当初の予想とは異なる結果である。「無言」という応答的行動が主張的目標を実現する上で有効であると評価することは、「何も言わなくても加害者は補償措置をとってくれる」というふうに、加害者の良識を信じる傾向が強いことを意味している。このような子どもなら、仮に主張的行動を行ったとしても、婉曲的な行動をとるのではないと思われる。確かに、本研究で取り上げられた主張的行動は、補償的措置を加害者に明確に要求するというものではなく、いずれもやや婉曲的で控え目な主張行動である。従って、ここで得られた結果は、加害者の良識に対する信頼の高さと本研究で取り上げられた主張行動の婉曲性との関連性が反映されたものと推測される。

社会認知の変数と報復的攻撃行動との関連については、援助意図判断(-.13)、友好的目標設定(-.36)、主張的行動の有効性判断(友好的目標-.20)が負の有意な標準偏回帰係数を示した。これは、加害者の援助的意図を正確に判断できないほど、友好的な対人的目標を設定する傾向が低いほど、また、主張的な行動をとると相手から好かれなと思う傾向が強いほど、報復的攻撃行動を行いがちになることを意味するもので、当初から予想された結果であると言えよう。ところで、主張的目標設定が正の有意な標準偏回帰係数(.24)を示したが、このような結果は当初予測していなかったものである。報復的攻撃行動は、自分に被害がもたらされてはじめて引き起こされる攻撃行動である。したがって、そこには単に加害者にしかえしするというだけでなく、

加害者に謝罪や後始末を求めるなどの主張的な意図も含まれていると思われる。そのように考えるならば、今回得られた結果もまず妥当なものと評価することができよう。その他には、「泣く」の有効性判断(友好的目標)が正の有意な標準偏回帰係数(.13)を示している。これは当初予測された結果ではない。また、TABLE 4に示すように、「泣く」の有効性判断(友好的目標)と報復的攻撃行動は無相関($r=.02$)であり、標準偏回帰係数の数値も低い。従って、この結果は一般化可能なものとは必ずしも思われないので、解釈は差し控える。

次に「無言」について見ると、主張的目標設定(-.22)、主張的行動の有効性判断(友好的目標-.22)で負の有意な標準偏回帰係数が得られた。これは、謝罪や償いを要求するなどの対人的目標を設定する傾向が弱いほど、また、主張的な行動をとれば仲間から嫌われると判断するほど、何も言わなくなることを意味しており、予め予想された結果であると言えよう。また、「泣く」の有効性判断(友好的目標)も負の有意な標準偏回帰係数(-.16)を示し、泣くことが相手との友好関係の維持にマイナスに作用すると思うほど、何も言わないという行動をとることが明らかになった。これも、当初の予想と一致する結果である。攻撃的行動の有効性判断(友好的目標)が「無言」に対して正の有意な標準偏回帰係数(.15)を示したが、このような結果は当初予測しておらず、説明が困難なものである。TABLE 4に示すように、攻撃的行動の有効性判断(友好的目標)と「無言」は無相関であった($r=.07$)。標準偏回帰係数の値も低いので、これも一般化可能な結果とは思われない。そこで、解釈は差し控える。

最後に、社会認知の変数と「泣く」との関連について検討する。既に見たように、社会認知の変数から「泣く」という行動に対する重回帰分析で得られた重相関係数は、.35とすべての応答的行動の中で最も低い数値を示した。これは、「泣く」という行動はどちらかという情緒的な反応という色彩が強いため、社会認知の変数との関連が全体的にやや低くなったものと思われる。それでも、ここでは、不可抗力判断(-.17)、主張的行動の有効性判断(友好的目標-.18)、「無言」の有効性判断(主張的目標-.18)で負の、敵対的意図帰属バイアス(.19)で正の有意な標準偏回帰係数が得られた。TABLE 1の値からわかるように、不可抗力判断は意図一手がかり発見技能の項目の中で最も判断の困難なものであった。従って、この判断が正確にできないということは、他者の意図を判断する能力がやや未熟であることを意味すると思われる。また、行動尺度で最も低い評定値を

示したことから推察されるように、このような状況で「泣く」という行動は小学校高学年の児童にしてはやや幼い行動であると思われる。従って、この結果は意図判断という社会認知的能力の未熟さと行動上の未熟さとの共変関係が反映されたものと解釈できよう。また、敵対的意図帰属バイアスが強いほど、「泣く」という結果が得られた。従来、敵対的意図帰属バイアスは攻撃的行動の正の予測子となることが指摘されてきたが(Dodge, 1980)、泣くといった年齢不相応の一ある意味で逸脱した行動との関連性が見られたことは、この認知変数が挑発場面における逸脱行動に対して、これまで考えられてこなかった新たな機能を果たすことを示唆するものであるように思われる。「泣く」という行動では、主張行動の有効性判断(友好的目標)と「無言」の有効性判断(主張的目標)で負の有意な標準偏回帰係数が見られたが、これは、主張的な行動をとると相手との関係を損なう、または、何も言わなければ相手は補償的な行動をおこなわないと判断するほど、「泣く」という行動をとることを意味するもので、当初の予想と一致する結果であると言える。

討 論

社会認知変数と応答的行動の関連性について、これまでの結果を総括しつつ、今後の課題を述べる。

本研究では、挑発状況の解釈、対人的目標設定、応答的行動の有効性判断といった3つの領域に属する15の社会認知変数と、主張的行動、報復的攻撃行動、無言、泣くという4種類の応答的行動との関連が検討された。重回帰分析の結果、社会認知変数と4種類の応答的行動との重相関係数はすべて有意となり、仲間による挑発場面における応答的行動は、社会認知変数と関連があることが示された。個々の社会認知変数と応答的行動との関連性を見ると、「泣く」の有効性判断(友好的目標)と報復的攻撃行動の間に見られた関連性、攻撃的行動の有効性判断(友好的目標)と無言で示された関連性以外は、いずれも解釈可能なものであった。

本研究で取りあげられた社会認知変数の中で比較的多くの応答的行動の予測子となったものとしては、友好的目標設定、主張的目標設定、主張的行動の有効性判断(友好的目標)の3つの変数があげられよう。友好的目標設定は、主張的行動の正の予測子となり、報復的攻撃行動の負の予測子となった。主張的目標設定は、「泣く」を除くすべての応答的行動の予測子となった。また、主張的行動の有効性判断(友好的目標)は、報復的

攻撃行動、無言、「泣く」の負の予測子となった。仲間による挑発場面の応答的行動に関与する社会認知変数としては、これらの変数が重要であると言える。

なお、挑発状況の解釈の諸変数については、敵対的意図帰属バイアスならびに不可抗力判断は「泣く」の予測子となること、さらに、援助意図判断は報復的攻撃行動の予測子となることなど、本研究で新たな結果が得られた。しかし、敵対的意図帰属バイアスと報復的攻撃行動では、有意な正の相関がみられたものの、標準回帰係数が有意とならなかったことは、この変数が報復的攻撃行動の予測子として注目されてきたことを考えるとやや意外な結果と言える。そこで、挑発状況の解釈の諸変数を説明変数、対人的目標設定ならびに応答的行動の有効性判断の各変数を基準変数として重回帰分析を行った。その結果、敵対的意図帰属バイアスは、友好的目標設定に -0.36 ($t=-6.34, p<.001$; $r=-.37$)、主張的目標設定に $.28$ ($t=-4.75, p<.001, r=.26$)、主張的行動の有効性判断(主張的目標)に $-.28$ ($t=-4.75, p<.001$; $r=-.27$)、「無言」の有効性判断(主張的目標)に $-.32$ ($t=-3.19, p<.01$; $r=-.18$)の有意な標準偏回帰係数を示した。特に、対人的目標設定の2つの変数は報復的攻撃行動の予測子となることから、敵対的意図帰属バイアスは、対人的目標設定や応答的行動の有効性判断の諸変数に影響を与えるという形で、間接的に報復的攻撃行動に影響を与えるという可能性が示唆された。

以上に述べたように、本研究では、仲間による挑発場面における社会認知変数と応答的行動との関連性が明らかにされた。しかしながら、本研究で用いられた行動測定は自己報告形式の質問紙であった。自己報告形式の質問紙による測定は、被験者自身の自己認知によって媒介されるため、実際の行動傾向を測定しているとは言い切れない。それは行動については知識を測定しているとも言えるかもしれない。そのため、今回得られた結果についても、あくまで仮想場面を用いた質問紙によって得られた限りのものであることを忘れてはならない。今後は、倫理的な問題を考慮しつつ、例えば、仲間による挑発場面を人工的に作り出し、そこでの応答的行動を観察するという方法や、ゲス・フー・テストのような仲間による指名・評定法によって日常の挑発場面における行動を測定するといった方法によって挑発場面における社会認知変数と行動との関連性を検討することが必要であろう。

また、今回得られた結果では、社会認知変数による応答的行動の説明率(R^2)は12.3%~33.6%とやや低い値にとどまった。このひとつの原因としては、いく

つか重要な社会認知的変数を説明変数として加えなかったということが考えられる。例えば、Spivack & Shure (1974) の言う、対人的問題解決における代替的思考 (alternative thinking : どのような種類の解決方略をいくつ産出できるか) や、Bandura (1977) の自己効力 (self-efficacy) などは、本研究では取り上げられなかったものであるが、社会的行動との関連を示す研究結果もあり、今後検討する価値のある社会認知的変数であると思われる。これらの変数を取り入れ、挑発場面における社会的認知のより包括的で内的整合性の高いモデルを組み立てることは、そのような場面における応答的行動の説明と予測の向上のためには不可欠の重要なステップであると思われる。

引用文献

- Bandura, A. 1977 Self-efficacy : toward a unifying theory of behavior change. *Psychological Review*, **84**, 191—215.
- Boldizar, J.P., Perry, D.G., & Perry, L.C. 1989 Outcome values and aggression. *Child Development*, **60**, 571—579.
- Cairns, R.B., Cairns, B.D., Neckerman, H.J., Ferguson, L.L., & Gariépy, J. 1989 Growth and aggression : 1. childhood to early adolescence. *Developmental Psychology*, **25**, 320—330.
- Dodge, K.A. 1980 Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development*, **51**, 162—170.
- Dodge, K.A. 1986 A social information processing model of social competence in children. In M. Perlmuter (Ed.) *The Minnesota Symposia on Child Psychology*, Vol. 18, Lawrence Erlbaum. Pp. 77—135.
- Dodge, K.A., McClasky, C.L., & Feldman, E. 1985 Situational approach to the assessment of social competence in children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **53**, 344—353.
- Dodge, K.A., Murphy, R.B., & Buchsbaum, K. 1984 The assessment of intention-cue detection skills in children : implication for developmental psychopathology. *Child Development*, **55**, 163—173.
- Dodge, K.A., Pettit, G.S., McClasky, C.L., & Brown, M.M. 1986 Social competence in children. *Monographs of the society for research in child development*, No. 213, (Vol. 51, No. 2)
- Dodge, K.A., & Somberg, D.R. 1987 Hostile attributional biases among aggressive boys are exacerbated under conditions of threats to the self. *Child Development*, **58**, 213—224.
- Grusec, J.E., & Redler, E. 1980 Attribution, reinforcement, and altruism : a developmental analysis. *Developmental Psychology*, **16**, 525—534.
- 濱口佳和 1989 Provocation 場面における児童の Social Competence の研究 —社会認知的変数の測定とそれに関連する要因の検討— 筑波大学修士論文
- 大淵憲一 1982 欲求不満の原因帰属と攻撃反応 実験社会心理学研究, **21**, 175—179.
- 大淵憲一 1986 質問紙による怒りの反応の研究 : 攻撃反応の要因分析を中心に 実験社会心理学研究, **25**, 127—136.
- Perry, D.G., Perry, L.C., & Rasmussen, P. 1986 Cognitive social learning mediators of aggression. *Child Development*, **57**, 700—711.
- Price, J.M., & Dodge, K.A. 1989 Reactive and proactive aggression in childhood : relations to peer status and social context dimensions. *Journal of Abnormal Psychology*, **17**, 455—471.
- Renshaw, P.D. & Asher, S.R. 1983 Children's goals and strategies for social interaction. *Merrill-Palmer Quarterly*, **29**, 261—282.
- Spivack, G., & Shure M.B. 1974 *Social adjustment of young children : a cognitive approach to solving real life problems*. San Francisco : Jossey-Bass.

付 記

本研究をまとめるにあたり、御指導、御助言いただいた筑波大学心理学系 高野清純先生、杉原一昭先生、新井邦二郎先生に深く感謝致します。また、快く調査に御協力いただいた東京都小平市立第2小学校の先生方ならびに児童の皆さんに厚く御礼申し上げます。

(1992年1月22日受稿)